

## 退官にあたって

梶 哲 夫\*

昭和23年3月、東京文理科大学を卒業した時、41年後、筑波の地において、母校の発展としての筑波大学で定年を迎え、しかも、筑波大学社会科教育学会の機関誌である『筑波社会科研究』に退官に関する拙文を書くようになるということは、全く考えてもいなかったことはいまでもない。もっとも、昭和51年4月に大塚から筑波大学に移行してきた時、私は筑波山をみて懐かしい思いにかられたことを忘れられない。それは、戦前の昭和14年、当時東京高等師範学校附属中学校の2年生であった私は、修学旅行でこの筑波山に来ているのである。私のアルバムには、友人が、筑波神社のそばにいる私、山頂でスケッチをしている私を撮ってくれた写真がある。まさに半世紀前のものである。人生63年、来し方を振り返ってみると、不思議な縁を覚え、考えさせられることが少なくないものである。ここに、「退官にあたって」を書く機会を与えていただいたことに感謝しながら、私の思いを述べてみたい。

### 〈三つの幕引きを体験して〉

私は、退官を前にして、筑波大学教育学研究科の『教育学研究集録』の第12集(昭和63年10月20日発行)に、「私の社会科教育に関する研究」を執筆したが、その最後に次のように述べておいた。

「定年を前に、私の人生を回顧してみると、私は歴史的な三つの幕引きに立ち会ったことになる。第一は、昭和20年8月15日の終戦であって、前橋陸軍予備士官学校において、この歴史的な幕引きを陸軍の末端の一兵として体験した。第二は、母校の東京教育大学の閉学であって、昭和53年3月31日、社会科教育講座の責任者として、当時の大学院の院生諸君とともに、母校の幕引きに立ち会うことになった。そして、まさかと思っていた第三の幕引きが現実となったのである。それが、今回の小学校低学年の社会科の廃止と高等学校の教育課程から社会科という教科が姿を消すという事態である。この三つの幕引きはもちろん性格が違うが、私にとっては、どれもきわめて厳しいものである。人生60年の意味を改めて考えさせられている。特に第三の幕引きにいたっては、私が40年間、直接かかわり微力を尽してきた社会科に関することである。まことに定年直前の厳しい体験といわざるをえない」

このうちの第一の幕引きについては、私たちは、日本国憲法の制定を中心として、新しい民主的な社会、国家の建設に向って努力することによって、むしろ新しい幕あけをし、今日に至って

---

\* 筑波大学教育学系

いる。次の第二の幕引きに関しては、東京高等師範学校、東京文理科大学を背景とする母校の閉学であり、まことに感無量のものがあった。しかし、この閉学については、感傷にひたっているわけにはいかなかった。つまり、母校の閉学に向って努めるとともに、一方、その発展としての筑波大学を創設していく仕事があったからである。特に、中等教員養成の伝統を筑波の地にということは、私たちの悲願だったのである。そして、これが具体的には、新しい大学院修士課程の構想の中に、教育研究科として生かされ、そのうちの教科教育専攻に社会科教育コースとして結実されることが目指されたのである。ところでこの点については、『桐峰』との関連で述べるのが望ましいと考えるので、第三の幕引きについては後述することとして、次にはこの『桐峰』について触れることとしたい。

#### 〈「桐峰」において取り上げてきたこと〉

『桐峰』は周知のように、筑波大学の教育研究科における社会科教育コースの学生の修了を記念して作成される文集である。私はこの文集の第1号から毎回、拙文をだしてきたが、私としては、私なりに、それぞれの年度において印象的な事柄、記録としてとどめておきたいと考える問題を取り上げて書いてきている。次に第1号から第8号までのテーマをあげてみよう。

第1号： 「社会科教育コース」第1回生への期待（昭和56年3月）

第2号： この二年間―諸君の果たした役割（昭和57年）

第3号： 教え子から教えられて（58年）

第4号： 『桐峰』の原稿を書くころ（59年）

第5号： 「継続は力なり」（60年）

第6号： 「桐の葉」と教育研究科（61年）

第7号： 二つの体験（62年）

第8号： 1987年の秋と高等学校社会科（63年）

このうち、第3号だけは、全く私事にわたるきびしい体験をめぐってのものであったが、他はすべて社会科教育コース、筑波大学社会科教育学会関係のものである。以下、上述の内容との関係から、次の二点（第1号と第2号に関するもの）を再び掲載させていただきたいと思う。

#### 〈「社会科教育コース」の成立をめぐって〉

「大塚から筑波へ、この激動の歩みの中であって、東京高等師範学校以来の教員養成の伝統をなんとかして、新しい筑波大学に芽生えさせたいというのが私たちの願望でした。東京教育大学は、その名称と伝統から、世間からは中等教員の養成を中心とした大学のようにみられてきてはいましたが、実はそのような性格の大学ではありませんでした。意外に思う人がいるでしょうが、東京教育大学の成立の時の諸事情からそのようになってしまったのです。したがって、私たちと

しては、筑波大学においては、名称こそ教育大学と無縁になってしまっても、実質において、中等教員養成の中核となるものを創設したいと願ったのであって、このような切実な願いが教育研究科、特に教科教育専攻の成立の根底にあったのです。

ところで、この願望は、昭和53年度からほとんど達成されることになったのですが、教科教育専攻のうち社会科教育コースだけは日の目を見ることができませんでした。このコースの設立に努力してきた私にとって、この時の悲痛な思いは、おそらく生涯忘れることができないでしょう。社会科教育コースの成立はきわめて難産だったのです。他のコースと比べて一年おくれて成立したということは永久に残る事実となってしまったわけです。

このような成立事情があっただけに、今、その第1回生のみなさんが巣立っていくということを考えると、全く感無量のものがあります。昭和54年4月11日～12日の入学試験、24日の入学式とオリエンテーション、そして修士棟の前で朝倉隆太郎先生から記念写真をとっていただいたことが、昨日のことのよう思い出されます。新しいコースの出発は、苦勞の多いものです。なにしろ、レールがないのですから、自らの力でレールを敷設しながら前進していかなくてはなりません。試行錯誤的な面も少なくない状況もあって、みなさんにもいろいろと苦勞をかけたと思います。しかし、みなさんの中にも、将来、新設校の仕事に関係する人がでてくるでしょう。その際には、この筑波での体験を思い出してください。……」

以上は、『桐峰』第1号の内容であるが、「社会科教育コース」成立に関する特別な状況として留意していただきたいと考える。

#### 〈「筑波大学社会科教育学会」の創設〉

この点に関しては、『桐峰』の第2号に記録的な意味をこめて記述しておいた。学会も創立当時の事情ということになると、不明な点が多くなるものである。私たちの「筑波大学社会科教育学会」についても、このようなことが考えられる。したがって、拙文で恐縮ではあるが、第2号については、ほぼ全文を再掲載させていただくこととした。

「昭和57年2月11日、筑波研修センターを会場として開催された『筑波大学社会科教育学会』を創設するための会は、私にとって実に感無量のものであった。”筑波大学においては、社会科教育の発展は無理なのではなからうか”という声を直接、間接に耳にしながら、昭和51年4月、私は東京教育大学から筑波大学に移ってきた。諸般の事情から、社会科教育の直接の関係者は私ひとりであった。そこで当初は、全学を対象とする教職の社会科教育法の担当者でまず困ってしまったのである。幸い、地理教育法については茨城大学の中川浩一先生、歴史教育法は流通経済大学の小山田義夫先生が非常勤講師としてご協力下さることになった。悪条件のなか、ご足労いただいた両先生に今でも深く感謝申し上げている。

ところで、私の場合、当初は、月・火が東京教育大学の授業、水・木・金が筑波大学の授業、そして水はどちらかの大学の会議という状況であった。したがって、筑波大学の水の授業（教職の社会科教育法）が欠けることが多く、夕方5時すぎから補講することがしばしばだったのである。このような状態だったので、率直に言って、この時点においては、筑波大学における社会科教育学研究室が中心となって、今日のように博士課程（これは東京教育大学の伝統を基礎としている）、修士課程を背景として『筑波大学社会科教育学会』を創設するようになるなどということ、夢のようなことだった。それどころか、なんとか歯を喰いしばって努力していこうという気持はあっても、状況はあまりにも困難であった。本誌の第1号にも書いておいたように、教育研究科の設立、そして教科教育専攻の確立は、私たちにあって悲願であったが、この悲願の達成において、社会科教育コースだけが他のコースより1年おくれて成立せざるを得なかった。“筑波大学で、社会科教育は発展できるだろうか”という悲観的な見方が現実となったわけで、私も全く絶望的になり、夜も眠れないくやしさを味わったことが昨日のこのように思われる。

しかし、朝倉隆太郎、横山十四男両先生においでいただき、他学系の諸先生方の全面的なご協力によって、ようやく社会科教育コースも他のコースと肩を並べることができるようになった。ところで教師だけが、いかに意気込んでみても、学生諸君の奮起と協力がなくてはどうにもならない。その点、第一回生の諸君はよくがんばってくれたと思う。そして第2回生である諸君たちは、この二年間にわたってすばらしい貢献をしてくれた。諸君は入学すると直ちに、社会科教育文献目録を作成する作業に取りかかった。これは、日本社会科教育学会から委嘱された仕事で、この学会の第30回記念大会がこの年の秋、筑波大学で開催されるため、その記念行事の一つとして企画されたものであった。諸君の担任の横山先生、DCの江口、森茂両君を中心に、三浦軍三先生をはじめとする東京学芸大学のご協力により、この作業を推進するとともに、秋の学会開催の準備をすすめた。朝倉、梶、横山の三研究室の前の特別教室は、この作業と準備の中心となった。そして文献目録は完成し、学会の記念大会も筑波大学において見事に開催された。この文献目録の作成と学会の開催は、どちらも諸君たちの協力の成果であったが、これらを通してのより大きな成果は、DCとMCの諸君が密接になり、筑波大学社会科教育学会が創設される基礎をつくったことにあると考える。第二回生の諸君、本当によくやってくれました。心から感謝します。

一方、この二年間、社会科教育をめぐるでは、教科書問題などを中心として、多くの問題が発生した。これからも社会科教育の前途は、多難と思われる。諸君は、この二年間の体験を大切にしながら、わが国の社会科教育を担う者としての自負をもって努力してくれることを期待している。

筑波大学社会科教育学会は、会長・朝倉隆太郎先生(教育学系)、副会長・長瀬守先生(歴史・人類学系)のもとに発足したのである。

#### 〈社会科の理念を大切に〉

この『桐峰』第2号で指摘した「これからも社会科教育の前途は、多難と思われる」という予想が、ついに現実となった。これが、『桐峰』第8号の「1987年の秋と高等学校社会科」の内容とつながるわけであり、私の体験した第三の幕引きに関連するものである。この『桐峰』第8号には、「筑波大学社会科教育学会」の『会報、No.24』(昭和63年2月9日)に書いた拙文が掲載されているが、ここで再び、この拙文を提示させていただく。

「教育課程審議会は、昭和62年11月27日における『審議のまとめ』において、高等学校社会科を再編成して、地歴科と公民科とすること、世界史を必修とすることという方向を打ち出した。ついで同年12月24日における『答申』は、この方向を確認する内容のものであった。

このことは、どのように説明されようと、高等学校の教育課程から、戦後40年以上の歴史をもった社会科が姿を消すことを意味することはいうまでもない。しかも、この重要な問題が、社会科教育関係者からの強い要請にもかかわらず、これらを見做す姿勢で、昭和62年の秋、ごく短期間の間に決定されたということは、将来にわたって記憶にとどめておかななくてはならない。

ところで、高等学校社会科の実態が、科目中心主義の傾向が強かったことは否定できない。それだからこそ、『現代社会』が生まれ、その克服が意図され、そのための努力がなされてきていたのである。このような状況において、社会科が再編成の名のもとに、その存在がなくなるということは、まさにこれまでの努力に水をさすことにはかならない。

私は、しばしば、もともと高校社会科は名目的存在にすぎなかったのではないか。その存廃はたいした問題ではなく、むしろ二つの教科になり、必修単位が現在の4単位から8単位以上になるのなら、それは評価してよいのではないか、という意見を耳にする。そして現に、二教科、必修単位倍増により、ほとんどの既存の科目が実質的に必修が保障されるような方向を前にして、これをもってよしとする状況もみられるようになってきている。高等学校社会科とは、このようなもろい存在だったのであろうか。私は、社会科の存在意義は、むしろこれから改めて認識される必要があると考える。その存在が否定されることを契機として、その本質を問い直したいものである。

日本国憲法、教育基本法と深いかわりをもって、戦後教育の中核として成立し存続してきた社会科が、高等学校の段階で姿を消すということは全く不自然なことである。私たちは、1987年の秋を記憶にとどめ、社会科成立の原点にもどって、その本質を再確認し、21世紀に向けて社会科の復興を目指していきたいと考える。

元来、社会科は、わが国の民主主義の育成に対して重要な役割を担う教科として、小・中・高を通して設けられたものである。この社会科の使命について、高等学校においては、もうこれによいというのであろうか。私は決してそうは考えない。むしろ、わが国の政治、経済、社会的状況及び国際化の進展を考えると、ますます民主主義の健全な発達が必要であり、社会科の役割は大きいといわなくてはならない。また、社会科が大切にしてきた総合的な社会認識についても、その必要性が一層痛感されてきている。したがって、私たちとしては、このような社会科の理念を大切に考えていきたいものである。私たちの筑波大学社会科教育学会は、状況の変化に対応するに当たっても、この本質を大切にす基本的姿勢はこれを堅持していくことが必要と考える。

最後になりましたが、社会科教育コースの設立、筑波大学社会科教育学会の創設に関して、多くの方々のご教示、ご支援をいただき、その後も多大のご協力を賜わってきたことについて、心から厚くお礼申し上げたいと存じます。また、社会科教育コースの第1回修了生以来のみなさん及び主として、この『筑波社会科研究』の編集の面で協力してきた博士課程のみなさんに対して、その尽力に感謝したいと考えます。

筑波大学社会科教育学会のいっそうの発展を心から期待して、退官の挨拶とさせていただきます。